



## 「世代性」を感じて

学生支援センター  
センター長

丹羽 智美

令和7年度より学生支援センター長を拝命いたしました。今までは教員としての仕事をし、研究室を中心に学生対応をしていました。しかし、学生支援センターに席をいただいて座っていると、年中様々なことがセンターに舞い込んでくるのがよくわかりました。多くはトラブルや困りごとです。直接駆け込んでこられたり、電話をかけてこられたりします。内容の深刻度も様々です。丁寧に説明し対応しても、後で感謝されることはまれです。満足できる対応をして当たり前で、そうでなければ苦言を呈されます。なかなかしんどい部署だなと思いました。一方で、学生が元気に通学できるようになったようだとか、卒業できそうだとか、楽し

く部活動できるようになったようだとか、好転の様子を耳にする  
と安心します。

学生の頃を思い返せば、私自身扱いが面倒な青年らしい青年  
だったと思います。当時受講した青年心理学の授業で、青年とい  
うのは自分のされたことには敏感だが、自分のしていることには  
鈍感だと言われ、青年だった私はそんなことはないはずだとその  
時は思っていました。しかし、今思い返せば授業で聞いたことは  
その時の自分自身だったのです。学生時代、なぜ私の言うことを  
わかってくれないのかと相手に腹立たしく思いましたが、果たし  
て相手のことを同じくらいわかろうとしたのかと言われると、し  
ていないのです。

教員の立場になって、お世話になった先生方の思いが見えてきま  
した。様子を見て飲み込んだ言葉や、反発されるだろうけれども言  
うしかない言葉、見守る一方何かあった時に対応できるようにし  
ておく準備などをしていると、私も学生時代にそうやってうまく生き  
ていけるよう支えてもらっていたのだろうと感じています。

今度は私が見守り支える立場になりました。そういう順番なん  
でしょう。私がしてもらってきたものを今の若者世代に返す時な  
のだろうと思います。そういう気持ちで日々取り組んでおります。



## 知の情報発信を担う

学術情報課  
課長

鈴木 正明

学術情報課課長を拝命し2年が経過します。入職以来、教務  
課を振り出しに10を超える部署を経験し大学業務への理解を深  
め、配属された部署が加盟する協会や団体の委員等を経験し知己  
を得、学園・大学の大きな行事の企画・運営を担当することで知  
見を広げてきました。特に、法人本部事務室では学園の重要な  
業務をワンオペでこなし、ミスの許されないとてつもないプレッ  
シャーと一人戦いながらの毎日でした。そこから8人の部署に  
やってきて日々メンバーに助けられ、チームワークのありがたさ  
と人とのふれあいのあたたかさを実感している今日この頃です。

さて、学術情報課はこれまで図書館課という名前でした。業務  
の内容はというと、従来の図書館課業務に加え、学生さんや先生  
方が学習や研究を進める上で必要不可欠な文献や各種データや学  
内に発信する情報について、デジタル技術を活用して提供する取  
り組みを進めています。また、知の情報発信を担う部署として、

大学全体の情報環境を支えることに重点を置き、研究活動をス  
ムーズに進めるためのシステムの構築や、最新のICT技術の導  
入の推進を考えています。

とは言えまだまだ手探りの状態のため、これまでに構築した人  
的ネットワークを駆使し、他大学の図書館を20ほど見学して、  
業務形態は言うまでもなく利用者サービスに関する様々なヒント  
を得て、形にしています。その1つは「COCOROEらいぶらり」  
というSAさんの活動です。図書館業務の補助的な役割をはじ  
め、大学祭では2店を出店し自分達も楽しみながら図書館広報も  
担ってくれました。今ではSAさんは立派な学術情報課メンバ  
ーといっても過言ではありません。他にも、デジタルサイネージに  
よるインフォメーションへのシフト、ラーニングコモンズの利用  
促進等の事例を参考に業務を進めています。

そして、「学園は一つ」を合言葉に大学祭期間中に図書館でコ  
ンサートを実施しています。四天王寺学園の併設する小学校から  
大学までの児童・生徒・学生が参加し、日頃の練習の成果を披露  
し合います。会場は大盛り上がりで、観客も含めて本当に一つに  
なります。今後は音楽だけでなく伝統芸能等にも範囲を広げ芸術  
の分野の情報発信も進めていきたいと考えています。

学術情報課は、本来の図書館としては言うまでもなく、本学の  
知の情報発信の拠点として、課員全員の力を合わせ、日々邁進し  
ていきます。

## ❖ 「和」と「縁」を大切にすることの豊かさ — 仏教の教えとの出会いと和宗仏教青年連盟の活動に参加して —

教育学部 教育学科  
准教授  
吉田 祐一郎



四天王寺大学の起源となる四天王寺は聖徳太子により推古天皇元（西暦 593）年に日本最初の官寺として創建され、これまでに1400年を超える歴史を有しています。その長きにわたり脈々と受け継がれてきている理念である「和」について、私の仏教との関わりと経験談からお伝えしていければと思います。

私が聖徳太子と和の教えに出会ったのは、本学への着任前に在職していた短期大学が初めてでした。その短期大学も仏教を基盤としており、そこでも聖徳太子の十七条憲法にある「和を以て貴しとなす」とあわせて「和顔愛語」が大切にされていました。和顔愛語についてはUPÅYA第27号1面に、四天王寺学園理事長の塚原昭應先生が詳しく触れてくださっていますが、和やかな笑顔と慈愛に満ちた温かい言葉を用いて、相手の気持ちを大切に考えながら生活するという意味です。この和顔愛語の考え方は、社会生活でも大変参考になる教えであると思います。自分のふるまいが相手に大きな影響を与えること、とりわけ他者とのファーストコンタクトとなる顔の表情により出会う相手を快や、逆に不快にさせる力があると感じることから、私は日々の生活でも表情を意識しています。

次に私の本学着任前後の話に触れさせていただきます。私が四天王寺大学での奉職を開始したのは平成23（西暦2011）年です。この年の3月11日は日本の歴史上でも大きな災害のひとつとなりました。東日本大震災が発生しました。私の専門は福祉であり、特に災害時の被災地支援に関心を持っています。そのことから研究活動だけでなく全国各地で発生する災害発生時に災害ボランティアや福祉専門職として被災地支援活動に長年参加しています。東日本大震災が発生した当初も、3月14日に当時生活していた関東から交通機関が動いていたため新潟経由で宮城県に入り災害ボランティアセンターの立ち上げに向けた支援や生活支援活動に参加しました。私のように発災初期からボランティアや専門職など様々な支援者が被災地に入り、それぞれのできることを地元の被災者のみなさんのニーズを聴きながら活動していました。その後、私は4月に本学に着任するため一旦被災地を離れて関西に戻りましたが、入職後も休日の度に東日本大震災の被災地である宮城県や福島県と、東日本大震災による福島第一原子力発電所事故により県外避難をされていた関東地方の避難所に訪問し、生活支援や相談支援などの活動をしていました。

そのような当時、本学や本学の母体である四天王寺でも東日本大震災の支援活動として様々な支援活動が行われていました。そのひとつとして、四天王寺での和宗仏教青年連盟の活動があるとお聴きました。この和宗仏教青年連盟は四天王寺の僧侶のほか、系列法人である学校法人四天王寺学園と社会福祉法人四天王寺福祉事業団の職員や関係者も一般会員や賛助会員として活動できるとのことでした。僧侶の皆さんは四天王寺での速夜法要や、東日本大震災の被災地に訪問されて犠牲になられた方への法要や被害

を受けられた方への慰問、四天王寺などで義援金の托鉢や被災地の復興を目的とした物産品の販売など幅広く行われていました。私もこれらの活動に賛同し、少しでもお手伝いできればと考えたことから和宗仏教青年連盟の一般会員として加入し、僧侶のみなさんと一緒に活動に参加しています。そうしてこれまで東日本大震災や各地での災害発生時の支援活動、人々の祈りの場である四天王寺の境内のおそうじ会や東大門の仁王像のお身拭いなどに参加しました。

最近では昨年5月に奈良の東大寺で開催された「花まつり千僧法要」において、和宗仏教青年連盟の活動の一環として行われた令和6年能登半島地震義援金托鉢活動にも僧侶の方々と一緒に活動してきました（写真）。東大寺にお参りされた国内外の多くのみなさんが義援金の托鉢活動に賛同され浄財を奉納される姿は大変美しく映りました。なお、この花まつり千僧法要は全日本仏教青年会が主催し、宗派を超えた若手の僧侶などが東大寺に一堂に会して、盧舎那仏のもとで世界平和を祈念する法要として行われています。



これらの活動に参加している中で、私自身大変貴重な経験をするとともに、多くのことを学ばせていただいています。僧侶と一般などの立場を超えて仏教の実践行を進めることの尊さ、仏教思想を元にして利他の心を高めることのありがたさ、自己の人間性を見つめることの意味などです。その基盤には「和」と、和との出会いとしての「縁」があると思います。和宗仏教青年連盟の活動で一緒にいる、ある僧侶の方から「『和』とは同じ思想で同じ行動をする『同』とは違い、他人同士は絶対的に違う存在であるという観点から仲良く意見を交わし合い高め合って目標に向かう事に意味がある」と教えていただきました。ここにある他人との違いを認めるには、違いのある方との出会い、つまりご縁がなければ始まりません。このことを理解し、自らの強みや特性を活かしながら、他者との出会いを愉しみ、お互いの想いを伝え合い尊重していくことができれば、平和な世界の実現をめざして進んでいけるのではないのでしょうか。この考え方は和の教えを含めた仏教思想を学んでいる私たちだからこそ、この考えに通じることができるものと信じています。私も「今」と「これから」の多くのご縁を大切に生活していきたいと思っています。

### 「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただけの学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方などなだでも歓迎します。学部学科専攻も問いません。これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として

実施していた座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。



（杉中 康平）

西教寺（滋賀県）

## 第28回卒業生インタビュー

話し手：山口 望(やまぐち のぞみ) 志摩観光ホテル勤務(都ホテルズ & リゾーツ系列)  
(令和6年3月 人文社会学部国際キャリア学科卒業)

聞き手：奥羽 充規(仏教文化研究所研究員 文学部国際コミュニケーション学科教授、本編編集)



### 仕事について

私は現在、志摩観光ホテルのフロントスタッフとして勤務しています。一般的なホテルではフロントと他の業務が分かれていることが多いですが、ここではフロント業務だけでなく、チェックイン/チェックアウト、荷物対応、ドライバー業務、客室案内まで幅広い業務を担当しています。入社1年目は全ての仕事を覚えるのが大変でしたが、2年目になり落ち着いてこなせるようになったことで、ようやく一人ひとりのお客様に合わせたサービスができるようになりました。私は、フロントは「ホテルの顔となる場所」だと考えています。お客様と「最初と最後に接する場所」であり、お客様の生の声や「ありがとう」を直接感じられ、とてもやりがいのある大切なポジションだと感じています。また、リゾートホテルならではのゆったりとした接客ができる点も、私はこの仕事の魅力だと感じています。

### 「和の精神」について

学生時代に受けた「和の精神」の授業では、瞑想や写経、そして聖徳太子の考えを学ぶ機会があったことを記憶しています。当初は授業の目的があまり分からない部分もありましたが、参加していくうちにこの授業の大切さを実感するようになりました。

特に瞑想については、普段の生活の中で体験する機会ほとんどないことから、「心を落ち着ける時間が大切だと気づく時間」であることを実感させてくれる貴重な経験でした。仕事を始めてからは、忙しい中でも心を落ち着けることの重要性を実感しており、学生時代の「和の精神」の授業での瞑想体験が現在の生活や仕事で役立っている部分があると振り返って感じます。司会の上野先生がお話されていましたが、確かに実践行ですね。1年間の間、毎週木曜日に瞑想を行うことで瞑想習慣が生まれ、気づいたら瞑想を通して心を落ち着けることが自然とできるようになっていました。

また、「聖徳太子の教え」と現代の生活との関係については、当時から関心があったことから興味深く「和の精神」の講話で聞いていました。聖徳太子の時代の教えが現代にもつながっていることを驚きながらも「やはりそうなんだ」と実感しながら学んでいたことを記憶しています。そして、仕事をできるようになってからは、その学びが役立っていると実感する場面も増え、学生時代の経験が今につながっています。「和を以て貴しとなす」などは時代を超えた普遍の真理であると社会人として、日々実感させられる毎日です。

### 「学園訓」について

社会人になって私が特に大事だと感じているのは、「礼儀」と「誠実さ」です。学園訓でいうところの「礼儀を正しくせよ」と「誠実を旨とせよ」ですね。

私の職場は何よりもコミュニケーションが必須な環境です。社員同士はもちろん、お客様とのコミュニケーションはお客様をおもてなしする上で非常に重要な要素となります。そして、そこでは当然「礼儀

がないと、信頼関係が生まれにくく、円滑なコミュニケーションができません。人に対する「礼儀」とは、相手に対する敬意、尊敬であり、「このホテルに来てくださりありがとうございます」という「感謝」を示すことでもあります。現在、社会に出て2年目ですが体験的にそのことを実感する毎日です。また、礼儀を大切にすることで、上司や同僚の協力を得られるようになり、働きやすい環境が生まれると実感しています。お互いに相手への「礼儀」を重んじるコミュニケーションを行うことで気持ちよく働くことができます。このことは1400年以上昔から変わらないことに驚くとともに納得もしています。

次に「誠実さ」についてですが、誠実な対応ができることはお客様へのサービスの質にも直結します。誠実な態度は、お客様との信頼関係にもつながり、良い接客を実現するために欠かせない要素となります。また、それは同僚との関係性についてもいえることです。同僚と「誠実さ」を通じた信頼関係を築いて日々接することで、安心した職場環境で気持ちよく働くことができます。「誠実さ」も「礼儀」と同様に、人から信頼を得るうえで極めて重要な要素なのです。

人と接することの難しさは日々、様々な場面で実感させられますが、そのような中で自分の力を発揮できる経験が面白いと感じています。

### 在学生へのアドバイス

私が皆さんにまず第一に伝えたいことは、「仕事は大変なことも多いが、簡単にやめずに続けることに価値がある」ということです。確かに、現代は転職が普通の時代になってきました。時には、何かしらの失敗をしたことで仕事を辞めたいと思う方もいるかもしれませんが、また、すぐに次の転職先も見つかるかもしれません。しかしながら、壁にぶつかっても逃げずに乗り越えることで見える世界があります。私は、大学時代のゼミや学外活動の時間にチームワークや他者との関わり方の学びを得ることがたくさんありました。特に、「異文化を背景に持ち、異なる価値観を持つ人たちと共通のテーマに取り組む経験」は私にとって、人と人との関わり方の大切さを実感するうえで何にも変えられない財産となっています。もちろん、時には衝突することもあります。そのうえで、お互いに自分の意見を発信し合うことでお互いを深く理解し合い、そして目標を達成するために協働していく。人との関係での壁をいくつも乗り越えていくことで、素晴らしい関係性を築くことができたのです。私はその中で育まれたチームワークの絆を今でも大切にしています。

皆さんには、まだ大学での学生としての時間がたくさんあるかもしれませんが、しかしながら、その中で大きな壁にぶつかると、その壁を乗り越えようと努力し、足掻く機会はどれだけあるでしょうか。私は、一見乗り越えるのが困難に思える壁をどれだけ乗り越えたかによって皆さんの成長度合いは大きく影響すると思います。たとえ乗り越えられなかったとしても、何度失敗しても許される学生時代だからこそ積極的にチャレンジすることが可能なのです。皆さんを応援していますね!

### 令和7年度冬学期「和の精神Ⅱ」講話一覧

9月25日	藤谷 厚生先生	冬学期「和の精神Ⅱ」について	ウバーヤについて	杉中 康平先生	学園訓のエピソード入力について	
	仲谷 和記先生	写経の効果		11月27日	中田 貴真先生	和の精神 一花と暮らすー
10月2日	麻野 稚弓先生	写経の仕方・作法		12月4日	和田 良彦副学長	人権について考える
10月9日	桃尾 幸順先生	写経について			麻生 迪子先生・	日本語学習支援ボランティアの取り組み
10月16日	上野 舞斗先生	仏教語と英語の意外なつながり			文学部学生	
10月23日	上積 宏道先生	聖徳太子と福祉の心		12月11日	明石 英子先生・	和を以って保育をつなぐ
10月30日	防衛省自衛隊	大阪地方協力本部 阪南地区隊副隊長	1等陸尉		短期大学部学生	
	松場 宣仁 様	今日に即応し、明日に備える		12月18日	吉田 祐一郎先生	和と縁を大切にすることでひろがり
11月6日	植 朗子先生	『鬼滅の刃』をめぐる「救済」の表象			丹羽 智美先生	人助けのエピソード
11月13日	亀井 縁先生・	国際看護フィールドワークの学びについて			杉中 康平先生	学園訓のエピソード入力について
	看護学部学生			12月25日	須原 祥二学長	終講にあたって
11月20日	矢羽野 隆男先生	学園訓「誠実」について			藤谷 厚生先生	「和の精神Ⅱ」のまとめ

令和7年度より各回100分、全14回で授業を実施します。

# 聖徳太子ゆかりの地をめぐる

## — 聖徳太子と南岳衡山について —



今の南岳衡山に建つ祝融殿

飛鳥時代は、豪族や貴族の権利の争いが広がり、古代国家制度も未熟で、政治的混乱が続いた時代でした。聖徳太子は仏教を国教として禁めて、四天王寺や法隆寺を始めとするお寺の建立を進めましたので聖徳太子を「仏法を守護する王」として、「十一面観音・救世観音の化身伝説」「慧思転生説」「夢中往來の伝説」など、聖徳太子を理想の仏教的統治者として描くいろいろな伝説が広がりました。その中で太子が夢中に中国の衡山へ往來し、中国天台宗の第二代目の慧思より「法華經の法」を授かったという伝説について紹介したいと思います。

衡山は中国五岳の一つで、湖南省衡陽市に位置しています。五岳とは、中国古代において天下を象徴する五つの名山で、東西南北と中央に配されています。そのうち南方を守護する聖なる山が南岳衡山にあります。南岳は道教では不老長生や修仙の地とされ、仏教では慧思を中心とする実践的仏教が発展した「南岳仏教」の拠点として知られています。

慧思はこの衡山において法華經を中心とする実践的・観想的仏教を深め、「一念三千」へとつながる思想を育み、その弟子の智顛の代になって天台教学が大成されたようです。このような南岳法師の慧

思ですが、日本において注目され、聖徳太子が夢中に南岳衡山を往來し、慧思から法華經の奥義や観音の加護を授かったという伝説が広がりました。

慧思は「一切衆生に仏性あり」という法華經の普遍的救済観を強く主張しました。聖徳太子も慧思の思想を道標として『憲法十七条』において「人皆心有り」「和を以て貴しとなす」と説き、仏教的な人間平等観を政治思想にも応用したようです。



太子の魂、青龍車で中国・衡山へ  
聖徳太子絵伝: <https://adp.au.com/eden/>

これらの伝説は、聖徳太子が地理的実在を越えた仏教的聖者として、また日本仏教が中国仏教の正統的な法脈に連なっているということを示す、言わば日本仏教の正統性を支える象徴として理解されるものであり、中世の日本仏教思想の構築と形成において重要な意味を付与したと考えられます。つまり、この伝説によって、聖徳太子は単なる日本の政治家ではなく、中国仏教の正統な流れを体現する存在として位置づけられ、日本仏教の正統性を意義づけた事跡であったと考えられます。まさに、中国の南岳衡山は、聖徳太子のゆかりの地として語り継がれ、日本仏教における法華經思想の源流の一つともいべき聖地なのです。

(学生編集員 牛 思雨)

## 仏教のことば

### — 金剛 (Vajra) —

金剛 (Vajra) とは、古代インドのサンスクリット語に由来する言葉で、元々は雷電やダイヤモンドを意味していました。神々の武器としての強大な「破壊力」と、いかなるものにも破られない「堅固さ」という、二つの性質を併せ持つ用語です。仏教においては、この Vajra が煩惱や無明を一瞬にして打ち砕く智慧の象徴として用いられ、特に密教では、真理そのものが決して壊れることのない存在 (不壊) であることを示す根本概念となっています。

また日本仏教では、この金剛の概念は、視覚的にも強い形象を伴って

展開しました。その代表が東大寺南大門の金剛力士像です。憤怒の相をもって仏法を守護し、外からの邪悪を退ける存在として立つその姿は、単なる暴力性を表すものではなく、迷いを断ち切る覚悟と決断の象徴として理解されてきました。さらに中世には「婆娑羅」(Vajra) と呼ばれる独特の価値観も生まれ、常識や権威にとらわれない、奔放で剛直な生き方が称揚されました。婆娑羅大名の振る舞いも、既成秩序を打ち破る金剛的精神の一表現とみなされたのです。

さらに、私たちの身近にも「金剛」は地名としても存在します。南大阪から河内に連なる金剛山は、古来より修験道の靈山として信仰を集め、その揺るぎない山容そのものが金剛の象徴として人々に受け取られてきました。このように金剛 (Vajra) という言葉は、日本の思想・美術・文化・風土に深く根を下ろし、今なお私たちの精神世界を支える重要な仏教の言葉として息づいています。

(藤谷 厚生)

## 編集後記

第1面には、学生支援センター長の丹羽先生「[世代性]を感じて」、学術情報課の鈴木課長「[知の情報発信を担う]」のご寄稿を得ました。丹羽先生は、学生から教師へと立場が変わって分かること、受けたものを返すという世代間の意義を、鈴木課長は、知の情報発信を担う新部署でのチームワークの大切さを、記してくださいました。第2面の吉田先生は、被災地での福祉専門職としての活動や青年僧侶の方々との実践から感得した「和」と「縁」の繋がりを語られています。第3面は、ホテルマンとして活躍する卒業生の山口さんが、瞑想と「礼」「誠実」の大切さ、「人との関わりを大切にチャレンジを！」とのメッセージを、第4面は、留学生の牛 思雨さんが、本コーナー初の(中国のゆかりの地)に絡めて聖徳太子の不思議な夢の話を紹介してくれました。「仏教のことば」は、金剛山の由来ともなった「金剛」についてです。慌ただしい日々、暫し落ち着いて日常を俯瞰させてくれる紙面となりました。ご一読ください。(矢野 隆男)

### 研究員紹介

所 長 藤谷 厚生(教授)

主 任 杉中 康平(教授)

### 研究員

上 續 宏道(教授) 神野 雅代(教授)

矢野 隆男(教授) 中田 貴真(准教授)

吉田 祐一郎(准教授) 李 美子(准教授)

上野 舞斗(専任講師) 坂本 光徳(専任講師)

西口 卓磨(専任講師)

客員研究員 桃尾 幸順

(職位・五十音順)

### UPĀYA (ウパーヤ) 28号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和8年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代)

URL:<https://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する  
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

**E-mail** [bukken@shitennoji.ac.jp](mailto:bukken@shitennoji.ac.jp)

(件名は「ウパーヤ」としてください)

